運ばれるに過ぎないことを注意しなければならぬ。

根室半島に見る此の海成准平原は釧路から以東一圓に展べられた大地形で、此の種のものとしては將に我國第一のものであらう。（本間）

伊太利ところ〴〵（六）

瀧川規一

〔纏頭の心理〕伊太利に入つて纏頭に再び頭を腦した。最初この問題で頭を腦した時は故國を發して乘船した時である。故國内の旅行には常にこの纏頭若しくは祝儀が頭痛の一になる。旅馴れた者にとつても時には纏時の多少によつて用事さへ便ぜぬことがある。交通瀕繁なる歐米諸外國が果して如何なる習慣をもつてゐるかは旅客にとつて常に頭を腦ます處であり且つ興味ある交通界の一問題である。旅馴れた人々は纏頭のことなどは話題にするのも恥かしいと云はんばかりの顏をしてゐる。懷を黃色の鑛物で腐らす人々は亦一笑に附し去る傾向がある。然し纏頭を貰ふ側から云ふならば纏頭も一種の財源である。輕々に看過することが出來ない。纏頭の少きが故に顏色を異にし剩へ客に不愉快を感ぜしめる程になることがある。特別賞與金の減額すら罷業を惹起する世の中である。纏頭の少きが故に所要を便ぜぬこと位は當然過ぎぬ程當然であると思へばそれまでであるが、スピードの時代にあつても、纏頭の多少によつて與へる者にも與へられる者にも可成の氣遣ひがあるとすれば、相當の改良の餘地が無いでもないと

思はれる、諸外國にあつて事狀が判明せぬ時益この纏頭問題に頭を腦ます。時には纏頭に腦まされて纏足的な束縛を受けることすらある。

纏頭は多々益辨ず、瑣々たる區事豈論ぜんやと云ふ人も屢見受ける。さう云ひ放つが爲めに人物評價が騰ることがある。然し時には降ることがある。降騰は必竟ずるに對者若くは聽者の人物價値如何による。論語孟子を標準にして賢愚の品評をなす者がある。思想單純なる時代に於ては聽者を感心せしめることがある。複雜なデリケートな問題を論ずる時に孔孟の標準が必ずしも當るとは限らないことがある。天下に於て旅客が只一人の場合では如何樣に振舞ふとも差支はない。然し同種の旅客が二人以上になる時に纏頭を貰ふ側にとつては無意識若くは有意識に比較論をする時がある。例へば某內閣の首班が一泊した。その時の祝儀は百圓、女中等一同に五十圓を振舞つた。然るに前內閣の大臣はそれ以上の挨拶振りを見せたとする。こんな場合に積極消極兩政策の象徵として差別を考へられることすらある。さて旅客の身分如何は不明であり只國籍を同じくする二人の外來客の場合にはどうなる。今假りに外國に旅する日本人の場合を想像する。前日本人は纏頭を意外に吳れた日本人と云へば金離れがよいと思つてゐたのにけちくさい日本人が來て國人同樣にしかぽちを吳れない。こんな日本人は好遇しなくてもよいとなる。斯んな場合を想像すると、米人の言說が卒直であり且つ多くの經驗を積んだ人の苦勞言であることを感ずる。米人は云ふ。旅館にあつて室代、食料、風呂代、靴磨代、荷物運び代等凡ては旅客の便を圖るが爲めに細目的に定つてゐる。それ以上は感謝の言辭さへ述べるならばよろしい。然るに歐洲に行けば所定代金以上にポチがホテルの附けに附加されてゐる。一割以上二割までが附加されてゐる。それが一般の習慣であるとすればよろしい。然るに好んで多額のぽちを與へる人がある。そんな人は自分一人はそれで虛榮心を滿足せしめることが出來る。然しそれが範をなして次の旅客が迷惑をな

すことがある。結局最初の旅客は次の旅客の財布を强要せしめたことになる。旅客間の共同德義を想つてポチ振蒔きは愼む可しと云ふのが米人の著作に係る旅行案內書の說くところである。日本人は一般に金離れがよいと伊人は云ふ。ミラノで特別優遇された時纏頭問題で頭を腦ました直接原因はホテルの附けに一割のポチが既に料金に附加さてゐる。これを與へたので特別に與へなかつた。然し給仕頭は六つかしい顏をしてゐたので、あれで不足であつたか知らんと後で氣がとがめる。次の都會に到着した時に如何にすればよいのか知らんなどと取越し苦勞さへ起つた。

英國各地を旅行した時には英人がする通りの纏頭を與へてゐた。一割で充分であつた。旅館によつては料金につけてある。つけてゐない時は別に與へる。小用を賴めばその度每に二片若くは三片をその都度に與へる。斯んなことをすれば日本人はその金を地に投げつけて怒るであらうと思つた。然し考へ直せば至極便利な習慣である。晝食をすると五十錢である。五錢（英人ならば大抵二錢）を食卓に殘して立ち去る。筆者自身が或る英人に買物を依賴された。その時矢張二錢貰つた。變に思つて返却すると英國の風習だと敎へられた。セイント・オルバンスと云ふ倫敦近くの町へ、近代科學の元祖ベーコンの舊宅を見る可く案內を請うて、ポチを出し、それが館主であつた爲めに却つて叱られたことすらあつた。

佛蘭西では大抵ビルにつけてある。氣が樂であるが田舍町では時につけてゐないことがあるうつかり遣り過ぎると意外の誘惑さへ試みられることがある。獨乙、瑞西等では英國同樣多少を論ぜず對遇に差別がなく一定の額をビルにつけてある。或る旅館でポチの分配について帳場の者同志が口論をはじめた。部屋附きのボイが帳場女に向てポチの等分を主張してゐる。其處へ仲裁に入つた結果ポチ以上の金を呉れてやらなければならなくなつたことがある。喧嘩の仲裁は損役である。英國人のなす獨乙人の惡口で

は今にもポチを吳れるやうに獨乙人はズボンのポケットに手を入れ貨幣の音をたてるが扨てとなつて一文も吳れないと云ふ。音丈け鳴らして正體を見せないのは獨乙人に限らず白人が往々なす處である。邦人は稍もすると正體を見せ過ぎ一本調子であつて損をすることがある。商業上外交上の取引でも常にこの一本調子で損役をひきうけてゐることが屢である。百弗の札を出しこれで少額のポチを受取ることを要求し釣錢なきことを聞くやそれでは次回に與へると云つて家を立ち去つた米婦人を瑞西で目擊したことがあつた。然し本家本元の米國では偖にこのポチ制度がないので旅行には氣樂を感じた。只汽車中の黑人に就いて大に閉口させられた話を屢聞く。然しそれも考へ樣である。國內の汽車旅行ですら車內給仕に關して氣を揉むことがある。

埃及でピラミッド見物に出かけ駱駝の背に跨りながら御者からバクシッシュ（ポチのこと）を要求され餘りの度々で應ぜぬ時馬子はその度毎に駱駝に一鞭あてる。駱駝は飛び上る。背の客はそれが恐ろしさに小金を吳れる。機を捉へた御者は更に要求する。文字通りにポチを强請られ身體を搖すられるのはこの時である。

抑もポチと云ふ言葉は或る辭書によれば畿內の語とある何かの隱語から由來したかまた外來語であるか判明せぬが、ポチの事實は等しく世界到る處にありまた旅客にとつて煩はしさを感ぜしめる問題である。これまでの旅行で鈍感になりかけてゐた旅客の頭はミラノで優遇された結果再び敏感に逆戻りポチの多少と相手の顏色とに氣を揉むまでになつた。

摘錄

○小藤博士の『環北太平洋地域の地文』

小藤博士のゲルランド地球物理學雜誌（第二四卷三六八—三七〇頁一九二九年）に記述された所を抄譯すると次の如くで、東亞地體構造論上に多くの暗示を與へて居る。北太平洋は南太平洋から南海諸島によつて立境されて居る。この諸島は古代の赤道地中海帶即ち古生代テーチス海の延長であり殘物であるらしい。環北太平洋の東緣地方には略並走する高處と中間低地とがあつてエリアス山から眞北西に走り、大洋の境に沿うて